

早稲田大学高等学院研究年誌第六一号 抜刷
二〇一七年三月発行

『更級日記』の長谷寺記事と菅原道真

大塚誠也

『更級日記』の長谷寺記事と菅原道真

大塚 誠 也

『更級日記』（以下『更級』と略記）の作者とされる菅原孝標女は、菅原道真直系の子孫である。そのため、日記には道真への直接的な言及は存在しないものの、孝標女が父祖道真をどのように意識していたのか、日記中から道真に関する記述を見出しうるかといった問題は、先行研究でもしばしば論じられてきた。

例えば、上洛の記の竹芝伝説と道真の関わりを論じた後藤祥子氏、継母上総大輔の詠歌と飛梅伝説の関わりを論じた田中喜美春氏、日記中の漢詩的表現と道真の関わりを論じた張陵氏、東国の笠森寺等と道真の子孫の関わりを論じた元吉進氏等が挙げられる^①。父である孝標と道真の関わりを論じた池田利夫氏、松本寧至氏等も関連として挙げられよう^②。

本稿はこれらの研究と軌を一にし、日記中の長谷寺記事と道真との関わりを論じる。後世の偽書等まで視野に入れたつ、新たな指摘を試みたい。

以下、『更級』の長谷寺記事の特徴をpushさせた後、道真の作と偽られた『長谷寺縁起文』等を考え併せる。その上で各寺社に共通する十一面観音の存在を補足し、まとめとして当時の天神信仰と孝標女の問題を考察する。

一 『更級日記』の長谷寺記事

『更級』の中で長谷寺が登場する場面は三箇所あり、寺社としては、その登場回数、分量において日記中トップである⁽³⁾。日記では長谷寺は「初瀬」と呼ばれている。

A 母、一尺の鏡を鑄させて、え率て参らぬかはりにとて、僧を出だし立てて初瀬に詣でさすめり。(中略) この僧帰りに、「夢をだに見て、まかでなむが、本意なきこと。(中略) (女) 『この鏡を、こなたにうつれる影を見よ。これ見ればあはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたまふを見れば、臥しまろび泣き喚きたる影うつれり。(中略)」と語るなり。
(三二〇頁～三二二頁)

B そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊とのしるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、(中略) (女) 「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしく頼もしくて、いよいよ念じたてまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。祓などして上る。三日さぶらひて、曉まかてむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば夢なりけり。
(三四一頁～三四五頁)

C また初瀬に詣づれば、はじめにこよなくもの頼もし。ところどころにまうけなどして行きもやらず。山城の国柞の森などに紅葉いとをかしきほどなり。初瀬川わたるに、

初瀬川たちかへりつつたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む
と思ふもいと頼もし。

(三四八頁)

Aは少女時代の記事である。母は、孝標女の将来を占わせるため、僧を初瀬の長谷寺に遣わした。これは、長谷寺、石山寺、鞍馬寺参詣を道中危険だと断念し、かろうじて清水寺に参詣した後のことである。この記事からは、他の寺

社に比べ、長谷寺が孝標女の将来と関連付けられていた形跡が読み取れる。ちなみに僧は夢告で、高貴な女性から鏡の中の悲しげな情景と嬉しげな情景を見せられるが、これは日記末尾で不幸な老残の身を嘆く述懐（三五六頁）の伏線となっている。

つぎのBは壮年期の記事である。後冷泉天皇の即位に伴う大嘗会の当日、孝標女は長谷寺参詣に出発した。一世の見物である大嘗会をよそに出立する孝標女は、周囲から奇異の目で見られたようである。この参詣は旅程が非常に詳細に記され分量が多い。内容としては、天照信仰（内裏）や稲荷信仰と関わる書き振りで、孝標女の出世栄達を示唆する夢告を含む。Bに関する先行研究には、孝標女の政治的意図を読み取る福家俊幸氏、久下裕利氏のもの⁽⁴⁾や、長谷寺の観音信仰と内裏の天照信仰の連続性を推測する松本寧至氏、小内一明氏のもの⁽⁵⁾等がある。いずれも卓見であるが、稿者はこの記事がAと同じく孝標女の今後を示唆している点、特に注目したい。

最後のCはBのすぐ後の記事である。初瀬を再訪した孝標女が、Bと同じく御利益を頼もしく思う場面である。

右のAとCからは、孝標女の未来が長谷寺の靈験により暗示されていることがわかる。類例は他の寺社参詣にもあるが、清水寺の「行くさぎのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」（三二〇頁）という夢告や、石山寺の「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」（三四〇頁）という夢告のように、いずれも長谷寺と比較して茫洋としている。広隆寺や鞍馬寺参詣が夢告を伴わないということを考え併せても、長谷寺が他の多くの寺社に抜きん出て孝標女の人生と結び付いていることがわからう。

長谷寺の靈験は天照信仰や稲荷信仰が混在しており、単一なものとしては描かれていない。そのため、道真や天神への意識を検討する余地もあると考えられる。次節では『長谷寺縁起文』等の、後世のいわゆる偽書を見ていく。

二 長谷寺の縁起類と菅原道真

後世の長谷寺関連資料には、道真を作者と偽るものがある。まずはその中でも成立が早いとされる『長谷寺縁起文』の冒頭を引用する。

吾遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真。添加^二寺官^一附^二大安寺^一。因依^二小僧之請^一攀^二入長谷靈寺^一。爰則面^下為^二勝絶^一之靈場^上。……

右は「吾……菅原朝臣道真」と、執筆者が道真であるように始まる。そして道真が長谷寺に入り、藏王権現の靈夢を見る話に続き、長谷寺にまつわる様々な挿話が語られていく。

『長谷寺縁起文』の末尾には「寛平八年二月十日 都維那僧行空」とあり、「執筆」の項に再び「遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道真」と道真の名が記されている。

この寛平八年二月十日という日付は偽りであり、後世の成立とされている。近年の研究では、藤巻和宏氏はこの縁起文の成立を南都復興等を論拠として一二世紀後半とし、上島亨氏は興福寺所伝等を論拠として一二世紀初頭としている^⑥。諸氏の推定に幅はあるが、仮に一二世紀初頭の成立であれば孝標女の時代から約五〇年下った程度であり、あながちに無関係と断ずるべきでないとも考えられる。

つぎに、『長谷寺縁起文』より成立時期は下ると考えられているが、近い位置にある『長谷寺密奏記』がある。これはいわゆる神道的な記述が目立つが、『長谷寺縁起文』と相互補完的な内容になっている^⑦。こちらも末尾に「寛平八年二月十日」の日付と、「執筆」として「遣唐大使中納言從三位兼行左大弁春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣」の署名が記載されており、その後に後人の書き足しという体裁で「菅右丞相入此山而曰……」と、道真が長谷寺に大鳥居を立てた説話が付載される。『長谷寺縁起文』について注目されよう。

ちなみに、この両書を踏まえて後に成立した『長谷寺験記』（または『長谷寺靈験記』）もある。『長谷寺験記』は大部であるが、道真や天神の説話を多数収録しており、後世における長谷寺と道真・天神の結び付きをよく示す資料である。

また、関連として長谷寺の隣地の與喜天満神社が挙げられる。管見の限りでは孝標女の時代以前にさかのぼる史料は確認できなかったが、與喜天満神社は『日本書紀』に登場する菅原氏の祖・野見宿禰のゆかりの地であるとして、その起源の古さを主張している⁽⁸⁾。

以上、長谷寺と道真の結び付きが確認できる諸資料を通覧した。孝標女の時代までさかのぼる資料として確たるものは挙げられなかったが、『更級』の長谷寺記事の背景に道真が存在する可能性は一考すべきであろう。

寺社縁起の作者として著名な文人貴族が擬されるケースは珍しくないが⁽⁹⁾、長谷寺の縁起類に道真が選ばれたことにはしかるべき経緯があるのだろう。『長谷寺縁起文』が成立する以前から、すなわち孝標女の時代以前から、長谷寺と道真、ないしは天神をゆるやかに結び付ける意識のようなものが存在したのではないか。前節で述べたように、『更級』の長谷寺記事は天照信仰や稲荷信仰と結び付いていた。孝標女に関しては、特に長谷寺の信仰における多重性を想定したくなる⁽¹⁰⁾。

次節では、その道真と長谷寺を結び付ける具体的な要素として、十一面観音を考える。

三 十一面観音、あるいは観音信仰をめぐって

長谷寺は『三宝絵』の「長谷菩薩戒」によれば、古くから霊木を用いた十一面観音像を本尊としていたようである。

コ、ニ沙弥徳道トイフ者アリ。此事ヲキ、テ思ハク、「此木カナラズシルシアラム。十一面観音ニツクリタマ

ツラム」ト思テ、養老四年ニ、今ノ長谷寺ノミネニウツシツ。徳道力無シテ、トクツクリガタシ。(中略) 神龜四年ニツクリ終ヘタテマツレリ。(中略) 徳道、々明等ガ天平五年ニシルセル、観音ノ縁起并ニ雜記等ニ見ヘタリ。『三寶絵』が引用する「天平五年ニシルセル、観音ノ縁起并ニ雜記」は現在散逸しているが、源為憲が依拠したこの記録の信憑性は高いだろう。この長谷寺の本尊が十一面観音であるということが、道真と結び付きうるのである。

ここで大宰府安樂寺について確認したい。安樂寺は現在の大宰府天満宮にあたり、道真が没した地において早くから道真、すなわち天神の祭祀場であった。『菅家御伝記』(嘉承元年(一一〇六)成立)には、安樂寺の十一面観音に關する記載がある。

安樂寺学頭安修奏狀云、大宰府安樂寺者、贈大相国菅原道真公喪葬之地、十一面觀世音大菩薩靈應之處也、延喜五年八月十九日味酒安行依_三神託_一立_三神殿_一、稱曰_三天満大自在天神_一、：

『菅家御伝記』が引用する「安樂寺学頭安修奏狀」は現在散逸しているが、これには安樂寺が十一面観音靈應の処だとある。「安樂寺学頭安修奏狀」がいつ頃書かれたものか、すなわち「安修」がいつ頃の人物かは不明である。しかし『菅家御伝記』が引用元を必ず示す編纂方針を採っていることや、この他の引用資料が歴史資料として信頼に足るものであることから、この奏狀の述べる内容は、後代の創作ではなく信憑性のあるものと考えられる。『菅家御伝記』自体は孝標女の時代以後の成立であるが、安樂寺が十一面観音靈應の処であるという伝承は、おそらく孝標女の時代以前から伝わっていただろう。

さらに安樂寺は、孝標女にとって馴染みの深い寺社であった。孝標女の同母兄弟である基円が安樂寺の別当になっていたことが、『尊卑分脈』や『安樂寺別当次第』からわかる。後者の注には「資忠孫贈二品御弟、孝標子也、于時依_レ無_三長者子孫_一用_レ之」とあり、それまで傍流の氏長者の子孫が別当を務めていたが、その家系に子がいないため、孝標男の定義に氏長者が移り、弟の基円が安樂寺別当になったという経緯が説明されている。

また、同時代の人々にとつても安楽寺は有名であつた。宣旨の作と伝わる『狭衣物語』巻二には「うち続き親たち隠ればりて後は、安楽寺といふ所になんはべりし」(①三〇二頁)とあり、飛鳥井の君の兄僧が身を寄せていた場所として安楽寺が設定されている。

他に、『経信集』一〇番詞書の「往年参安楽寺聖廟……愁詠蕪詞奉呈别当阿闍梨に」や、『為信集』一一二番詞書の「安楽寺にまゐりて、かまどの山のけぶりをみて」のように、大宰府を訪れた男性歌人が安楽寺に参詣している例もある(①)。半世代ほど時代が下るが、大江匡房などは大宰帥にあつて安楽寺に関する多数の漢詩、和歌を残している(②)。このように、安楽寺は孝標女と密接に関わり、かつ同時代の人々にも親しまれていた。安楽寺は西国の受領達を通じて、京でも意外と人口に膾炙していたようである。当然、孝標女は安楽寺と十一面観音の結び付きを認知し、意識していたと考えられる。藤巻和宏氏は後世の大安寺と長谷寺の縁起をめぐり、十二面観音の共通性に着目しているが(③)、孝標女とその時代にあつては、安楽寺と長谷寺間において着目されるべきかと考えられる。

本稿一節で見たように、『更級』で長谷寺が抜きん出た扱いを受けていることから、十一面観音の照応を通じた父祖道真ないしは天神の介在が、可能性として想定されよう。

以上の考察に併せて、念のため道真と観音信仰についても触れておきたい。道真の著作からは観音を厚く信仰していた事例が複数確認できる。漢詩では例えば、『菅家文章』一一七番の天折した我が子の極楽往生を願う「南無観自在菩薩。擁護吾兒坐大蓮」、『菅家後集』四七八番の左遷の折に離京を憂う「都府樓繞看瓦色。観音寺只聴鐘聲」、同集五一一番の死期を悟り観音を念じる「此賊逃無處。観音念一廻」等がある。願文では『菅家文章』六五〇番の吉祥院法華会願文において、幼少期に観音力によって病が平癒したという「発下奉_レ造_レ観音像_一之願上。念_二彼観音力_一、汝病得_二除癒_一」がある(④)。当時の貴族にとつて観音信仰は珍しいものではないが、以上の事例も参考とならう。

また、道真の死後、大宰府安楽寺だけでなく北野天満宮でも観音が重要な信仰の対象であつたという記録が、『北

野天満自在天神宮創^二建山城国葛野郡上林郷^一縁起』(天徳四年(九六〇)成立)に見える。「……亦依^三託宣^一、建^三立^一三間堂一字^一、安^三置^一觀世音菩薩像一体^一、其外雜事累年多許矣、敢非^レ可^三細記^一……」とあるが、北野社では神託により三間堂に觀世音菩薩像が安置されたらしい。後世の『北野天神縁起』では「^レさても本地を申せば、觀世音のすいじやく、十一面の尊容なり」と、天神の本地を十一面觀音としている。他の縁起類からの影響が想定されるもの、あるいは北野社の仏像も十一面觀音であつたかもしれない。

このように、長谷寺と安樂寺は十一面觀音によつて照応し、他の道真に関する事例からも觀音信仰が確認できる。これらと後世の道真偽作の長谷寺縁起類とを考え併せると、孝標女の時代の長谷寺、道真間のつながりがより想起されうると推察される。それは、いわゆる同体説のような明確な教義というより、孝標女や周辺の菅原氏等が抱いていた、ゆるやかな神仏信仰の連続性のようなものであつたかとも考えられる。実際、『更級』には先述した長谷寺、稻荷、天照信仰のゆるやかなつながりが確認できる。

次節ではまとめとして、天神信仰が広まっていた当時において、孝標女が父祖道真をどのように意識していたのか、ないしは『更級』の記述と道真との関わりを、我々ほどのように理解すべきか、といった問題を考える。

四 まとめ — 当時の天神信仰と孝標女 —

ここまで、『更級』は道真や天神に関する直接的な記述を持たないが、長谷寺記事は道真ないしは天神信仰とゆるやかに結び付いていたのではないかという見通しを述べた。それは主に後世の縁起類や十一面觀音の照応から導かれるものであつた。

では、父祖でありながら神として祀られた道真は、孝標女に対してどのような存在だったのであろうか。

道真は、死後朝廷に祟る存在として畏怖の対象でありながら、天神として祀られ、次第に菅原氏の氏神や国家安寧の神として、広く信仰を集める存在となった。孝標女の時代には、天神（道真）は既に信仰の対象として、朝廷や貴族達の間にも広く浸透していたらしい。並木和子氏、袴田光康氏等によれば、摂関家である藤原師輔が北野社を厚く信奉したことを始めとして、特に道長の代以降、摂関家の子孫が北野社に毎年神馬を奉納するようになる等、施政者と天神信仰は結び付いていったようである⁽¹⁵⁾。

また、当時の文人貴族達も道真・天神を信仰し、多くの詩文を作っていたようであり、『本朝文粹』等に収められている詩序等からはそれがよくうかがえる⁽¹⁶⁾。

孝標女はこのように天神信仰が世に広まった時代を生きた。その状況下において、彼女は自身が道真直系の子孫だということを意識していただろう。ここで、彼女はなぜ日記中にそれを直接記述しなかったのかという疑問が出来る。推測の域を出ないが、道真は単なる父祖ではなく、朝廷に祟り、また朝廷を守護する天神という、特殊な存在になつてしまったことが関係しているのではないだろうか。

道真は天神となつており、その家系を露骨にアピールすることは、菅原氏の文人貴族や神職ならばともかく⁽¹⁷⁾、仮名文芸に携わる一介の女房としてはタブーの意識がはたらくのではないかと考えられる。清少納言は『枕草子』中で歌人の家系を謙遜しているが、孝標女にとつては同じような話題は難しいだろう。

その場合、日記中の道真関連の記述は、作者によつて意図的に韜晦された形か、作者の意図しない形で現れるはずである。『更級』の長谷寺記事は先述の通り日記中の「孝標女」の未来を暗示する内容となつており、靈驗あらたかな父祖道真が介在する箇所としては、ふさわしいと考えられる。

孝標女は物語作家であつたとおぼしく、著作と伝わる『浜松中納言物語』には渡唐する主人公が描かれる。また同じく著作と伝わる『夜の寝覚』には道真歌の引用とされる表現がある⁽¹⁸⁾。今後も孝標女の著作から道真の存在を広

く探求し、その意義を考究したい。

※引用は、『更級日記』は「新編日本古典文学全集」に、歌集は『新編国歌大観』に、『三五絵』は「新日本古典文学大系」に、『菅家文章』『菅家後集』は「日本古典文学大系」に、『北野天満自在天神宮創建山城国葛野郡上林郷縁起』(『北野天神御伝并御託宣等』所収)『菅家御伝記』『安楽寺别当次第』は「神道大系」に、『北野天神縁起』は「日本思想大系」に、『長谷寺縁起文』は「大日本仏教全書」に、『長谷寺密奏記』は内田溍子「内閣文庫本『長谷寺密奏記』―翻刻と解説―」(『国文論叢』第三二号、二〇〇二年八月)にそれぞれ抛った。

注

- (1) 後藤祥子「更級日記の作者と東国―竹芝伝説の周辺―」(木村正中編『論集日記文学 日記文学の方法と展開』笠間書院、一九九一年四月)。田中喜美春「招誘歌の深滞」(『国語と国文学』第七七卷第一〇号、二〇〇〇年一〇月)。張陵「『更級日記』と漢文学についての一試論―景物描写を中心に―」(『国語国文』第七九卷第七号、二〇一〇年七月)、元吉進「更級日記と上総国笠森観音」(『字苑』第九〇三号、二〇一六年一月)。
- (2) 池田利夫「菅原孝標像の再検討―更級日記との関連に於て―」(『国語と国文学』第五五卷第七号、一九七八年七月)、松本寧至「菅原孝標は同行しなかった―『扶桑略記』竜門寺参詣記事新解―」(『古代文化』第三二卷第四号、一九七九年四月)。
- (3) ちなみに、日記中に頻出する寺社の登場回数は、長谷寺、広隆寺(太秦)がともに三回であり、関寺、清水寺、石山寺が二回である。
- (4) 福家俊幸「『更級日記』の初瀬詣で考―御禊の日に出立した意味―」(『中古文学論攷』第一二号、一九九〇年一二月)、久下裕利「迷走する孝標女―石山詣から初瀬詣へ―」(福家俊幸・久下裕利編『王朝女流日記を考える―追憶の風景』武蔵野書院、二〇一一年)。
- (5) 松本寧至「母一尺の鏡を鑄させて―『更級日記』と長谷寺信仰―」(『国学院雑誌』第八〇卷第四号、一九七九年四月)、

小内一明「あまてる御神をねむしませ」の夢―更級日記解釈私見―」（『群馬県立女子大学国文学研究』第二号、一九八二年三月）。

- (6) 藤巻和宏「長谷寺縁起文」天照大神・春日明神誓約譚をめぐって―第六天魔王の登場と「長谷寺密奏記」との照応―」（『国文学研究』第一二七集、一九九九年四月）、藤巻和宏「長谷寺験記」成立年代の再検討―長谷寺炎上と「行仁上人記」―」（『国文論叢』第三六号、二〇〇六年七月）、藤巻和宏「菅原道真仮託の縁起―大安寺と長谷寺―」（『巡礼記研究』第四集、二〇〇七年九月）等、上島享「中世長谷寺史の再構築」（『国文論叢』第三六号、二〇〇六年七月）。より先行する諸説は、藤巻論文の一つ目にまとめられている。なお久下裕利「大望祈願の物語―石山詣から初瀬詣へ―」（『更級日記の新世界』武蔵野書院、二〇一六年）には「菅原道真が著わしたとも知られる『長谷寺縁起文』には長谷寺の十一面観音の本地垂迹が語られ、この観音が天照大神との一体とも喧伝されている時代状況があり……」とあるが、成立時期等をより慎重に勘案すべきかと考えられる。
- (7) 前掲(6) 藤巻論文一つ目等を参照されたい。
- (8) 與喜天満神社についての先行研究は多くないが、例えば岩城隆利「長谷寺と与喜天神社と連歌」（『大和文化研究』第五卷二号、一九六〇年二月）、横田隆志「長谷寺験記」から見えるもの―与喜天神縁起を中心に―」（『日本文学』第五四卷第四号、二〇〇五年四月）等がある。
- (9) 堅田修「寺院縁起の研究」（『日本古代信仰と仏教』法蔵館、一九九一年）等。
- (10) ちなみに中世になると、長谷寺はより多彩な信仰を併せ持つ場となる。遠日出典「長谷寺にみる天神信仰」（『長谷寺史の研究』古代山岳寺院の研究一、巖南堂書店、一九七九年）、吉川宗明「与喜山（奈良県桜井市）山中の「磐座」を探し求めて」（『岩石を信仰していた日本人―岩神・磐座・磐境・奇石・巨石と呼ばれるもの研究―』遊タイム出版、二〇一一年）等。
- (11) ちなみに時代は遡るが、『大式高遠集』一七五番詞書には「三月三日安樂寺花宴日、僧都元真のもとにいひやりし」とある。
- (12) 小峯和明「大江匡房―大宰府時代から―」（『国文学解釈と鑑賞』第五五卷第一〇号、一九九〇年一〇月）。
- (13) 前掲(6) 藤巻論文の三つ目。
- (14) 川口久雄校注『菅家文章・菅家後集』日本古典文学大系七二、岩波書店、一九六六年の六〇〇頁の注。
- (15) 並木和子「撰関家と天神信仰」（『中央史林』第五号、一九八二年三月）、袴田光康「光源氏の流離と天神信仰―「須磨」・

「明石」巻における道真伝承をめぐって―（秋澤互・袴田光康編『源氏物語を考える―越境の時空』考えるシリーズ三、武蔵野書院、二〇一一年）。

(16) 前掲(12) 小峯論文。吉原浩人「文道の大祖」考―学問神としての天神の淵源」（『日本における「文」と「ブンガク」』勉誠出版、二〇一三年）。

(17) 例えば、託宣によって道真に官位が追贈される際、菅原幹正は勅使に任じられ（『小右記』正暦四年（九九三）六月二五日条）、後日藤原道兼の見た夢告を聞いた際には「甚だ恐ろしい。感慨無量であり、道真が太政大臣の地位を欲することが私が思った通りであり神異を知った」という旨を語っている（『小右記』同年閏一〇月六日条）。また、近くは父孝標一〇月一九日条）、前掲(2) 両論文に詳しく論じられている。

(18) 石川徹「夜半の寝覚は孝標女の作と思う」（『王朝小説論』新典社、一九九二年）。

〈付記〉本稿は早稲田大学国文学会秋季大会（二〇一三年十一月二十九日、於早稲田大学）での口頭発表をもとにまとめたものです。発表及び成稿に際して、御意見・御教示を頂いた方々に厚く御礼申し上げます。